「鏡花全集」目録開口

芥川龍之介

鏡花泉先生は古今に独歩する文宗なり。先生が俊爽（しゅんさう）の才、美人を写して化を奪ふや、太真閣前（たいしんかくぜん）、牡丹（ぼたん）に芬芬（ふんふん）の香を発し、先生が清超の思、神鬼を描いて妙に入るや、鄒湛（すうたん）宅外、楊柳に啾啾（しうしう）の声を生ずるは已（すで）に天下の伝称する所、我等亦多言するを須（もち）ひずと雖（いえど）も、其の明治大正の文芸に羅曼（ロマン）主義の大道を打開し、艶（えん）は巫山（ふざん）の雨意よりも濃に、壮は易水の風色よりも烈なる鏡花世界を現出したるは啻（ただ）に一代の壮挙たるのみならず、又実に百世に炳焉（へいえん）たる東西芸苑（げいえん）の盛観と言ふ可し。
　先生作る所の小説戯曲随筆等、長短錯落（さくらく）として五百余編。経（けい）には江戸三百年の風流を呑却（どんきやく）して、万変自

ら寸心に溢れ、緯(ゐ)には海東六十州の人情を曲尽して、一息忽ち千載に通ず。真に是れ無縫天上の錦衣。古は先生の胸中に輳(あつま)つて藍玉(らんぎよく)愈温潤(おんじゆん)に、新は先生の筆下より発して蚌珠(ぼうしゆ)益粲然(さんぜん)たり。加之(しかのみならず)先生の識見、直ちに本来の性情より出で、夙(つと)に泰西輓近(ばんきん)の思想を道破せるもの尠(すくな)からず。其の邪を罵り、俗を嗤(わら)ふや、一片氷雪の気天外より来り、我等の眉宇(びう)を撲たんとするの概あり。試みに先生等身の著作を以て仏蘭西羅曼(フランスロマン)主義の諸大家に比せんか、質は擎天(けいてん)七宝の柱、メリメエの巧を凌駕す可(べ)く、量は抜地無憂の樹、バルザツクの大に肩随(けんずゐ)す可し。先生の業亦偉(またおほ)いなる哉。

先生の業の偉いなるは固(もと)より先生の天質に出づ。然りと雖(いへど)も、其一半は兀兀(こつこつ)三十余年の間、文学三昧(ざんまい)に精進したる先生の勇猛に帰せざる可からず。言ふを休めよ、騒人清閑多しと。瘦容豈詩魔(そうようあにしま)の為のみならんや。往昔自然主義新に興り、流俗の之に雷同するや、塵霧(じんむ)屢(しばしば)高鳥を悲しましめ、泥沙(でいさ)頻(しきり)に老龍を困しましむ。先生此逆境に立ちて、隻手羅曼(ロマン)主義の頽瀾(たいらん)を支へ、孤節(こせつ)紅葉(こうえふ)山人の衣鉢を守る。轗軻(かんか)不遇の情、独往大歩の意、倶(とも)に相見するに堪(た)へたりと言ふ可し。我等皆心織筆耕(しんしきひつかう)の徒、市に良驥(りやうき)の長鳴を聞いて知己を誇るものに非ずと雖(いへど)も、野に白鶴の廻飛(くわいひ)を望んで壮志を鼓(こ)

せること幾回なるを知らず。一朝天風妖氛を払ひ海内の文章先生に落つ。噫、嘘、先生の業、何ぞ千万の愁無くして成らんや。我等手を額に加へて鏡花楼上の慶雲を見る。欣懐破顔を禁ず可からずと雖も、眼底又涙無き能はざるものあり。

先生今「鏡花全集」十五巻を編し、巨霊神斧の痕を残さんとするに当り我等知を先生に辱うするもの敢て譾劣の才を以て参丁校対の事に従ふ。微力其任に堪へずと雖も、当代の人目を聳動したる雄篇鉅作は問ふを待たず、洽く江湖に散佚せる万顆の零玉細珠を集め、一も遺漏無からんことを期せり。先生が独造

の別乾坤(べつけんこん)、恐らくは是より完(まつた)からん乎。古人曰「欲窮千里眼更上一層楼(きはまらんとほつすせんりのめさらにいつそうろうをのぼらん)」と。博雅の君子亦「鏡花全集」を得て後、先生が日光晶徹の文、哀歓双双人生(あいくわんさうさうじんせい)を照らして、春水欄前に虚碧(きよへき)を漾(ただよ)はせ、春水雲外に乱青(らんせい)を畳める未曾有の壮観を恣(ほしいまま)にす可し。若し夫れ其大略を知らんと欲せば、「鏡花全集」十五巻の目録、悉(ことごとく)載せて此文後に在り。仰ぎ願くは瀏覧(りうらん)を賜へ。

（大正十四年三月）

底本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集第五巻」筑摩書房
1971（昭和46）年7月5日初版発行
入力：山田豊
校正：菅野朋子
1999年5月26日公開
2004年2月27日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。